

成存候得共、殿中之儀、殊に御嘉例之規式不相濟内故、無是非延引仕候、今以兩人と可相果儀候得共、左様御座候得、御家中騒動、御爲不可然候、私親爾來御厚恩を忘申に相成候ニ付、私切腹可仕候、御檢使被仰付、其上にて次郎作、九兵衛、切腹可被仰付候、以上、

正月二日

桐間伊束判

野中傳右衛門殿

一元日晚野中傳右衛門より渡邊左大夫を以、元政方へ申越候ハ、何卒和談させ申度候間、林三郎右衛門、深井正右衛門と寄合相談可仕也に候得共、伊束儀ニ候得、相談不罷成、由令返答、其後御家老中不殘異見被申候得共、取合不申、伊束より書付差上候以後、此上にも元政へ直談申度旨、寺村淡路を以、傳右衛門より申越候得共、出合不申事、

一元日二日にハ、伊束方より押懸可申様に存候哉、御家老中氣付、殊に九兵衛、次郎作方にてハ、事敷用心仕體、依之伊束元政屋敷邊にハ、遠見を附置、夜中ハ、門前を布引に見廻り申體ニ候事、一三日之晝、忠義公被仰出候ハ、親兵庫爾來御爲を存候、伊束儀是式之事に可致切腹と申段、御爲に不成申分ニ候、此上ハ、双方御暇被下候旨、於御城生駒木工に被仰渡、木工退出之處、伊束儀心底爲詰者に候條、此上にも切腹仕儀も可有之、左様無之様に木工覺悟仕得と追懸御意之由、一伊束ハ、即刻屋敷を明け、見龍院迄立退、依之元政家來長谷川源右衛門、兼松八右衛門差添遣す、然ル處、關所之手形傳右衛門より不仕候に付、無是非見龍院に逗留相待事、

一元政儀ハ、不及申、生駒木工も御暇之願申上候筈に相究引籠事、

一伊束へ御暇被遣候儀、御後悔被遊、中村へ以早飛脚、匠作様呼に被進、同十日に御出府、伊束歸參之御相談に被掛御心、九兵衛、次郎作、閉門被仰付、伊束歸參仕候様に異見仕候得と、木工へ被仰聞候得共、一度御暇被遣伊束儀ニ御座候間、同心仕間敷と木工申上、其後ハ、木工も引籠罷在事、